YOL 讀賣新聞オンライン

綾瀬の金子さん　障害者のリアル知って　心のバリアフリー訴え

2023/06/18 05:00

自宅のベッドで棒をくわえてパソコンのキーボードを操作する金子さん（綾瀬市で）

身体に障害があり、電動車椅子で生活する綾瀬市の金子寿さん（６２）が、コロナ禍で中断していた学校での「福祉教室」を再開させた。３０年以上続けている教室では自身の日常生活を紹介しながら、一人一人が様々な人のことを思いやる「心のバリアフリー」を訴えている。「体力がある限り続けたい」と語るが、「若い障害者にも教室の活動に参加してもらえれば」と願っている。（小嶋伸幸）

児童に心のバリアフリーを訴える金子さん（綾瀬市の綾北小学校で）

５月２９日、同市の市立綾北小学校。金子さんは母校の４年生約６０人に電動車椅子での外出や、自身の生活の様子を紹介した。久しぶりの教室でやや緊張していたが、児童らは真剣なまなざしで聞いていた。

金子さんは同市生まれ。１７歳の時、高校の体操部での練習中、鉄棒から落下。肩から下が動かなくなった。「一生治らない」と医師から告げられた時は「もう死にたい」と思ったが、少しずつ前向きになり、２５歳から入院仲間と発足させた障害者の交流団体で活動。さらに、口にくわえた筆で絵を描き、障害者の国体では、車椅子で障害物をかわすスラローム競技で優勝した。

教室は、２５歳の頃、小学校時代の恩師から「学校で話をしてみないか」と誘われたのがきっかけとなった。バリアフリーの意識がまだ薄かった時代。それでも、障害者も多くの人と同じ地域で暮らしていることや、自分のように困難があっても乗り越えてほしいとの思いを伝えたいと、引き受けた。教室は小中学校や高校、大学に拡大し、綾瀬市内だけでなく、県内各地からも月に１回ほど呼ばれるようになった。

教室では、駅など街でのバリアフリーの現状を説明し、困っている障害者やお年寄りがいれば手助けしてほしいと呼びかけるが、話はそれだけにとどまらない。最後にはいつも「心のバリアフリー」を訴え、障害者らを手助けする思いやりの心を友達や家族にも広げてほしいと語りかける。そうなれば、差別や偏見、いじめの問題が社会からなくなると思うからだ。

コロナ禍の間はそれが伝えられず、「残念だった」という金子さん。オンラインでの教室も準備したが、新型コロナが５類となり、対面での再開がかなった。「気持ちはまだ２０歳、３０歳代のつもり」と意欲は尽きない。

ただ、２０２０年に還暦を迎え、白髪が増えた自分を意識するようになり、若い障害者にも教室の活動に加わってほしいと考えるようになった。「子どもたちにとって、それぞれの地域で一緒に暮らす障害者から話を聞いた方がより身近に伝わる」と語る。

金子さんが教室でいつも使う資料には「みんなのしあわせ」というタイトルが付いている。「障害者も健常者もみんなで助け合いながら、差別や偏見がなく、幸せに暮らせる社会になってほしい」という思いが込められているという。若い障害者の参加も願いながら、今後も体力が続く限り教室を続けるつもりだ。